

## 義人は信仰によって(マルコ 14:12-18)

神様のみことばをよく守ることが信仰生活だとほとんどの人が思っています。もちろん神様のみことばを守らなければなりません。しかし、信仰生活というのは文字通り、神様が私たちのためになさったこと、これからなさることを信じるのが信仰生活です。もし神様のみことばを守ることにフォーカスを合わせて、守ったから自分は大丈夫、義なんだ。守ってないからその人はだめだとさばいてしまうことになれば、ユダヤ教と何がどこが違うのでしょうか。多くのクリスチャンもそのようにユダヤ教のような感覚で信仰生活を理解する人が少なくありません。聖書の創世記 15:6 を見ますと、「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と書いてあります。パウロもローマ 1:17 において、「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです」とあります。今日の聖書を見ますと、弟子たちがいつものように過越の祭りを守るために、どこで何をどういうふうに用意すればいいのかと尋ねました。いつも彼らが用意して、過越の祭りを守っていたでしょう。彼らは言われた通り、聖書に書いてある通りに定められた時期に過越の祭りを守ることに専念していました。悪くありません。しかし、その過越の祭りは、イエス様ご自身のことを表すことなので、イエス様にとって地上で最後の過越の祭りになります。なので、その時はイエス様がいつものように弟子たちに任せないで、イエス様ご自身が指示なさり、人も部屋もすべてをイエス様ご自身が用意なさって、それを弟子たちがただ拾い上げるような感じでした。ニュアンスが全然違うわけです。自分で何かを守るということではなくて、主、イエスさまがなさったことを味わうことであり、それを信仰によって入って行くということが信仰生活の本来の意味です。ならば、私たちは何を信じて、また信じるとどうなるのかということ聖書を通して確認して行きたいと思います。

### 1. 神様が私のためにすでになさったことを信じる時、自分を祝福の人と見るようになる

まず第一に、信仰生活ということは、神様が私のためにすでになさったことを信じることであり、そのとき自分自身を祝福の人と見るようになります。

これが信仰生活です。みことばを文字通りにどれほどきっちり守ったのかが基準ではなくて、それ以前に神様が私のためになさったこと、すでに行われたことを信じることを信仰生活と言います。もっと正直に、また正確に申し上げますと、私たちは神のみことばを守ることはできません。だからイエス・キリストは代わりに守られ十字架で死なれます。そのキリストを信じることで私たちはみことばを守れるようになるわけです。守る前に信じることです。この順番の勘違いがあれば、せっかくクリスチャンになったにもかかわらず、なかなか答えに預かることが難しくなってしまう。もう一度申し上げます。神様が私のためにすでになさったことを信じるのが信仰であり、そのときにまず何をどうするかの前に、自分自身を祝福の人と見るようになります。神様が私のためにすでになさったことは一体何でしょうか。どういうことをなさったのでしょうか。

1) 神様がすでになさったこと-ヨハネ 19:30、ローマ 8:1-2、エペソ 2:3> I コリント 3:16、ヨハネ 8:44>ローマ 8:15、II コリント 11:30>12:9-10、II コリント 4:8-9、ローマ 8:28、ピリピ 3:20、II コリント 5:17  
それを一言で表す場面が、ヨハネ 19:30 です。十字架の上で神様が私たちのためになさることをすべて背負って行われていたイエス・キリストがすべてを完了したと宣言されます。すべてをなさいました。すでに十字架の上で、私たちのためにイエス様がすべてをなさいました。それを信じることを信仰生活と言います。何をなさったのでしょうか。ローマ 8:1-2 を見ますと「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」。キリストを信じて誰でも罪に定められることがないように完了されたわけです。覚えていてください。「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです」。キリストを信じて誰でも罪と死の原理から完全に解放されることができるよう完了しました。それを神様がすでになさったわけなのです。それでエペソ 2:3 を見ますと、私たちは生まれながら神の御怒りを受けるしかない子らとして生まれたものです。そのような私たちが I コリント 3:16 を見ますと、あなたがたは聖霊が宿る神の神殿であることが分かっていないの

か。そういう滅びるしかない神の御怒りを受けるしかない私たちが、内側に三位一体の神様が住まわれる神の神殿に変わることが完了したわけです。それを信じることを信仰と言います。もう一つ申し上げますと、ヨハネ 8:44 には、自分では認めたくないでしょうけれども、私たちは悪魔サタンを父と呼ぶしかない存在、そのような身分でした。そのような人間がローマ 8:15、神様を「アバ、父」と呼ぶことができるすべてを完了したわけです。誰がこのように罪人を変えることができるのでしょうか。神様しかできません。キリストを通して十字架の上でそのような救いのみわざを完了なさいました。すでに。それでそのキリスト・イエスを信じる者は、Ⅱコリント 11:30 を見ますと、こういうふうに言われています。「もしどうしても誇る必要があるなら、私は自分の弱さを誇ります」。それから、Ⅱコリント 12:9-10 を見ても、パウロはこのように告白しています。「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです」。弱さを抱えていると、その分ダウンするしかないのが人間です。なのにキリスト・イエスを信じる者は、その弱さがむしろ強さになり、その弱さを誇るができるすべてを完了したと宣言していらっしゃるのです。Ⅱコリント 4:8-9 にもこう書いてあります。「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」。どのような問題があっても、それが一切問題にならないように完了しました。誰でもキリスト・イエスのうちにある者は。それがすでになさったことなのです。これを信じるのが信仰生活であり、第一です。それで結局このようにパウロは宣言しています。ローマ 8:28。すべてを働かせて、益としてくださる。キリスト・イエスのうちにあるものは、私たちは良い悪い、厳しい、優しいさまざま評価があるでしょうけれども、そのすべてが益となるように神様はキリストを通して十字架の上で完了しました。これを信じることです。守るのではなくて、何かをどうする以前に信じることです。その結果、ペリピ 3:20 を見ますと、いつ私たちが死んでも天国に迎え入れられるように、天の御国の国籍が与えられて保障されているし、だからいつでも天国に行けるように完了したのです。いつ死んでも天国に行けるように十字架の上で完了しました。これが神様がすでに私たちのためになったことなのです。そのすべてをひっくるめて宣言している聖書の箇所がⅡコリント 5:17 です。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」。キリスト・イエスにあって滅びるしかない地獄の子であった、悪魔をアバ、父と呼ぶしかなかった、世の流れに従い、偶像崇拜によって滅びるしかなかった私たちが、全く新しく作り変えることが完了したわけです。すでになさいました。完了しました。これを信じることを信仰と言います。この信じることに対しては子どもなのか、年寄りなのか、勉強が足りないのか、学識があるのか、金持ちなのか、貧乏なのかは、一切関係ありません。肌色も関係ありません。家庭環境が暖かい環境なのか、親に恵まれているのか、あるいは変な親なのかなども一切関係ありません。誰でも信じる人は義と認められます。これを信じることなくして、神のみことばを文字通り守ろうとしたものがユダヤ教です。どうなってしまったのでしょうか。そうするとイエス・キリストを十字架で殺してしまいます。うっかりすると教会に通いながらも、自分の心の中でキリスト・イエスを十字架を殺してしまう場合がしばしばあるわけです。そうすると悪魔にやられっぱなしなのです。自分なりに良い信仰者、良い信仰生活をしようと頑張っているかもしれませんが、それは信仰生活ではありません。みことばを守る前に信じることなのです。もし私たちが自分で用意して、何とかできるのであれば、なぜ罪のないキリストが十字架で犠牲になったのでしょうか。できないから代わりになさって信じなさいとおっしゃっているわけです。キリスト教を基本から勘違いする場合がありますが、宗教ではありません。宗教は信じることの正反対なのです。すべて自分が主人です。自分がどうするかによってすべてが決まります。だから残るのは滅びること以外、何もありません。自分で何がどうできるのでしょうか。本当にできると思っているのでしょうか。キリスト教のキの字もまだ理解してないからです。信仰生活というのは、神様がすでに私のためになさったことを信じて、ただ喜び、感謝するだけなのです。

## 2) 自分への見方-エペソ 1:3(人間的条件、出身、バック、経験)

そして、この神様が私のためにすでになさったことを信じるときに自分自身を見る目が変わります。これを信じていないまま自分自身を見ているから、教会に通っていながらも自分を正しく見ることはできません。神様が新しく造り変えられた自分と向き合うべきなのに、そうではなくて古いままの自分、親や周りから言

われている世の基準で評価される自分しか見ることができないわけです。外見で自分を判断して、才能によって判断したり、周りと比べながら判断したり、そういうことで精一杯なのです。悪魔にやられっぱなしになります。霊的な戦いなのです。この神様が私のためにキリストを通してすでになさったことを信じるときに、刑務所の中にも、世の中のすべての人から指さされても、私は天にあるすべての祝福をいただいている祝福の主人公であり、幸いな者ですと自分を正しく見直すことができます。これを信仰生活と言います。自分を今まで自分が思っていた自分ではなくて、このように見つめ直さない限り、信仰生活はスタートしません。せっかく救われたのに、ずっと悪魔のエリヤでうろうろするしかないのです。なんと残念でしょうか。信仰には他になんの条件もありません。100%、200%キリストがすべてを完了してなさったので、ただ信じることで、それに照らして自分を見つめ直すことなのです。人間的な条件がどうであれ、どこの出身なのか、肌色がどうなのか、バックグラウンドがあるかないか、どのような経験をしてきたのか、一切こだわらないで、一切関係なく、私は幸いな者なのです。なぜでしょうか。神様が私のために十字架の上でキリストを通して、そうなるように関与なさったから、それを信じるからです。今現在、肉体的に環境的に変わっているかどうかということが基準ではありません。それに振り回されることを不信仰と言います。義人は信仰によって生きるわけです。世の中、宇宙にはない法則です。罪によって神様を離れて以来、この地球にはない法則です。信仰によって生きる。

### 3) 祝福の自分を前提に-マタイ 6:31-32、使徒 1:7

みことばを守る守らないはもちろん大切です。でも一番大切なのはその祝福の自分、神様に祝福された自分を一番大前提にして、常に一番、前に差し出すということが信仰生活です。それでそういう意味あいをもってイエス様が弟子たちに祈りを教えられたわけです。弟子たちがイエス様に祈りを教えてください。今パリサイ人も教えているし、バプテスマのヨハネも教えているのだからと、同じレベルで祈りを求めています。そのときにイエス様がおっしゃったわけです。「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るかなどと言って心配するのはやめなさい。こういうものは皆、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみんなあなたがたに必要であることを知っておられます」。どういう意味なのでしょう。「私は祝福の神の子どもです」を前提にしなさいという意味です。異邦人ではないのだ。祈る前に、自分は幸いな者なんだ。自分は祝福された存在なんだ。誰も奪うことができない天にある永遠のいのちを持っている者、私は幸せな者ですよ、ということが前提にならない限り、祈りは成り立ちません。祈る前にこれを大前提にしなさい。これを信仰生活と言います。イエス様が最後におっしゃいました。使徒 1:7、弟子たちが今こそイスラエルの国を再興してくださいと聞かされたときでしようかと聞いたときに、それはあなたがたは知らなくてもいいですよと答えます。どういう意味なのでしょう。国に関心など持たなくてもいいよという幼稚な話ではありません。彼らとその質問をぶつけたときには、私はキリストによってすべてを完了なさった神様がなさったことによって、極端に申し上げますと、国がどうなるかが私は幸いな者です。私は天の御国の民ですと告白すべきなのに、その前提が消えてなくなっているよという指摘なのです。それが大前提であれば、その質問は成り立たないのではないのでしょうか。あなたがたは本当にそれが大前提であれば、その信仰に立っていれば、今植民地であれ、また貧乏であれ、迫害があろうが、あなたがたがやるべきことは一つしかないよ。なぜそこら中の人と一緒にしてるのか。なぜ求めるものも一緒に、テーマも一緒なのかとおっしゃっている場面なのです。なぜなのでしょう。信仰生活をしていないからです。神がすでに私のためになさったことを信じるのが信仰生活です。自分を祝福の人として見つめ直すことなのです。そして、それを大前提にしていくことなのです。私たちの人生の歩みには、予期せぬ危機が迫ってくることもあるし、誤解を受ける場合もあるし、思い通りにうまく行かないで失敗する場合もあるし、どのような場合でも私たちはこれは譲ってもいけないし、忘れてはいけません。にもかかわらず、私は幸いな者。私は幸せな者、私は祝福されたものとなると、次の考え方が変わります。それを神の国と言います。自分で考えて自分のレベルでいざこざではなくて、神がどのように見ていらっしゃるのか、そちらの方に行くようになります。でも自分がそのように四方八方から苦しめられることでも奪われない幸いを持っている者だということが前提にならないと、その次は崩れてしまいます。全部が。いくら一晩中、真剣に考えたとしても、考えた分、マイナスなのです。これを信仰生活と言います。難しく思わないように。聖書を全部暗記できないから信仰生活ができないわけではありません。もちろん聖書を暗唱するというのは、刻印されるために必要なものではあります。信じることです。信じることには努力もお金も何も要りません。神の恵みを受け入れるだけなのです。

先ほど申し上げました続きになりますけれども、二番目です。

## 2. 神様が私のためになされることを信じる時、真の希望を持って立ち上がるようになる。

信仰生活は何なのか、何を信じるべきなのか、信じるとどうなるのか。神様が私のためにこれからなされることを信じることを信仰生活と言います。これから主のために頑張ろう。もちろん、そういう決断が求められる時があります。その前に神様がこれから私のためになされることを素直に信じる時、真の希望を持って立ち上がることができます。

どのようにでしょうか。人間的に見た時には、目の前が真っ白でこれで何ができるかというような状況であっても、決して失望したり、諦めたり、がっかりすることなく、希望を持って立ち上がって突き進むようになります。いつでしょうか。信じる時。神様がこれからなされること、それは誰も止められません。神様がこれから私のためになされること、それは一体何でしょうか。何をなされるのでしょうか。数え切れないでしょうが、それを一言でこのようにおっしゃいます。

### 1) ヨハネ 14:16、26、27

イエス様が最後の晩餐の時にヨハネ 14:16 でこのようにおっしゃいました。これからイエス・キリストを信じて幸いな者になった人々に対して何をなされるのかを先におっしゃいました。「わたしは父にお願いいたします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです」。もうひとりの助け主を私たちに送って、つまり聖霊を注いで、聖霊が内住して、聖霊が導かれて、聖霊の力が現れるようにするよとおっしゃったので、それを信じるか信じないかが信仰生活なのか不信仰なのかに分かれることとなります。と言いますのは、イエス様がおっしゃったので。もうひとりの助け主、聖霊が臨まれまして、その聖霊のわざが現れると、それですべてなのです。それを経験して行かないといけません。学業も事業も家庭環境も自分の内側もすべて完璧になさるので、聖霊様のわざ、神のわざですから、その一つによってすべてが完璧になります。だから聖霊の働きが答えなのです。それを信じることです。伝道とは何か。これを信じて聖霊に満たされたら神がなされることを見て行きます。ヨハネ 14:26-27 でこうおっしゃいました。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」。そうなります。パリサイ人はいくら言われても全く理解できない福音、いのちのメッセージが理解できるようになります。「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません」。聖霊が来られますと、イエス様が十字架にかけられても奪われることができない平安を保っていらっしやいましたが、その平安が与えられます。何が怖いのでしょうか。何が問題でしょうか。この平安がないから問題であって、問題が問題ではありません。その聖霊が与えられると言われています。ルカ 11:13 にもこのようにたとえ話の中でおっしゃいました。「してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますか」。神様がこれから救われた幸いな者になっている私のために、神の神殿と造り変えられている私のためになされることは、聖霊を注いで聖霊に満たすということなのです。皆さんが礼拝に来るたびに、礼拝を捧げるたびに、神がこれをなされるとおっしゃったのに、これを契約として握ってこうなるようにどれほど集中して求めつつ礼拝に臨んだのでしょうか。多分、一カ月経たないうちに変わると思います。いろいろな変化があると思いますが、その一番が伝道の門が開かれます。それが目的ですから。人格が変わるといってはありますが、それが目標ではありません。これが神がなされることです。もちろん礼拝のときだけではありません。常にこれをなされるとおっしゃっているから 24 時間成していらっしやるので、いつでも戻るべきなのです。しかし私たちは肉体を持って。いろんな生活をしているので、せめて礼拝の時だけはほかのすべてを一切断ち切って神がなされることにフォーカス合わせて、これを求めることが礼拝なのです。マルコのタラッパンでの最初の礼拝はこのような礼拝でした。礼拝はそういう意味でとても大切なのです。ローマ 8:32 にも「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありますか」。神様は救われた私たちに悪いことは一切行

うことがありません。神様が与えられるもの、神様がなさることはすべて善であり、すべて良いことだけなのです。どこでそれを根拠にして言えるのか。ご自分の御子キリストでさえ惜しまずに十字架に引き渡された方が、その後には違うなということは論理的にも合いません。それを信じるか、信じないかです。だから、私たちが見たときには辛い、厳しい、しんどいなといろいろあるかもしれません。また何でこんな環境なのか。職場が家庭環境が..と思うかもしれませんが、ヨセフは一度もそれで悪いと思ったことがありません。なぜでしょうか。神様は最善をなさる方なので。奴隷に売られたことも神様はすべてご存知であって、神様は良いことをなさる方なのです。これが神様なさることです。聖霊を与えられる方です。

## 2) 使徒 1:8-力を得て

それで使徒 1:8 を見ますと、その聖霊が臨まれまして、聖霊の力が表れたときにどうなるのか。私たちには自分の力ではない上から与えられる力に預かることとなります。それを御座の力と言います。つまり神様は救われた信者にこれから何をなさるかと言いますと、聖霊を注いでその人に上からの御座の力を与えられるのです。それを信じることです。

## 3) 使徒 1:8-地の果てまで証人

なぜそれが必要なのかと言いますと、エルサレムから地の果てにまでわたしの証人となるよ。その力をもってエルサレムから、皆さんが今いる現場からスタートして、237、5000 未伝道種族にまで証人として立てるためなのです。これがこれから救われた私たちに神様がなさることなのです。そのために事業に学業に才能、さまざまところに御座の力がよぎって現れるようになるでしょう。一番のポイントは上からの力、5つの力と言われている御座の力を私たちに与えられると約束されました。それがこれからはなさることです。皆さんが今いる現場が、皆さんの目にどのように映るかわかりませんが、どのような現場でもそこからスタートするのです。そこで証人として立たされることとなります。そこで必ずいのちの働きがなされることとなります。それは神様がなさることです。ただなぜそうならないのか。信じないからです。私がいる所だけは例外とみなしているのです。信じないのです。信じないで「神様、祝福してください。神様、しっかりとみこりのまに、みことばを守りますから」といくら祈っても..。信じることです。神様がなさるとおっしゃったことを素直に信じることです。聖霊を注いでくださる、それを信じるとそれを求めるでしょう。そこには御座の力が含まれているわけです。

## 4) 絶望的条件、最悪の状況

最悪の状況でした。初代教会は。そこでもそこからスタートしてローマにまで世界を変えることができます。皆さんひとりひとり世界福音化、237 と無関係だと思ってるでしょうけれども、皆さんが世界福音化です。どうすればいいでしょうか。聖霊が臨まれ、御座の力が与えられれば、必ずこれは世界福音化につながります。初代教会には自転車も自動車も飛行機もありませんでした。なのに地の果てにまで。話になるでしょうか。その根拠は御座の力が与えられるから可能なのです。どのような方法でなさるのか、その時代、時代によってなさるでしょうけれども、御座の力は時間空間を超越します。なので子ども一人が正しく恵まれても世界福音化につながります。そういう意味で皆さんがやっている学業、事業、仕事、小さなことすべてが 237、5000 未伝道種族、47 都道府県とに全部繋がっているとそのためのものだと思うのが信仰です。なぜなら神様がそうなさるとおっしゃっているのだから。大げさではありません。これが神様が私たちのためになさることなのです。先ほども申し上げましたように、このようなことが絶望的な条件の中で最悪の状況の中で言われて実行されました。それをタラップンでは nobody、nothing というわけです。だから言い訳など本当にありません。信じるだけです。

## 5) 不信仰、不平、否定的な言葉

さあ、この信仰を持つようになったときに、つまり神様が救われた私のためにこれからはなさること、それが何なのか一言で言うと、聖霊が注がれまして、力をいただいて、証人として立たされて、地の果てにまでそれをなさるとおっしゃいました。これを信じるときに不信仰、不平、不満、否定的な言葉を捨てることができるようになります。なぜなかなか自分の限界や不信仰、言い訳、否定的な言葉などが自分から離れないのでしょうか。この信仰がないからです。その人の体質もあるでしょうが、それが治る方法も信仰です。もう一度言います。信仰には資格とか何もありません。誰でも信じることができます。不公平感というものはあ

りません。

## 6) 祈りに専念

全部捨てて、これを本当に信じるときに、今申し上げました否定的なものを捨てて残るのは何かというと、これがその通りになることを信じて求めることなのです。祈りに専念することになります。それが祈りに専念するという意味なのです。なぜ専念するのでしょうか。これを信じるから。言い訳は通用しません。いらぬものなのです。祈り専念します。絶望的な条件でも最悪な状況でもそれに左右されることなく祈りに専念しています。レムナント7人の生涯を見ますと、その証拠がそこから読み取れるわけです。遠くにあるあるおとぎ話みたいに見てはいけません。旧約は私たちに具体的に実現されるためのサンプルでした。それが今の時代は信じるすべての人に普遍的にダビデにあった祝福が、ヨセフにあった祝福が注がれることになっています。それが今の終末の時代という時代なのです。

まとめましょう。義人は信仰によって生きるものです。神がなさったことを信じて、自分を祝福の人として見つめ直して、神がこれからなされることを信じて、不信仰を捨てて、祈りに専念することになります。これを信仰生活と言います。となると、みことばを守れるようになります。なので、自分に対する否定的なイメージ、否定的なセルフイメージ、また自分の人生に対して不安などは、本当は不安があるからではなくて、今申し上げましたクリスチャンの信仰がないからです。信じていないからです。もう一度言います。自分自身に対して否定的なセルフイメージ、自分自身を否定的に思っていると、人生も不安に思うしかありません。その理由をいろいろなところに求めるわけなんです。そうではなくて信仰がないからです。言葉を変えますと、信仰を回復しなさいという神様からのサインとして受けとめてください。自分自身に対して否定的なイメージ、人生に対しての不安があれば、それは信仰を回復しなさいという神様のサインです。それで神がなさったことを信じて告白して、なさることを信じて祈る信者になりましょう。それで過去のせいにして、環境のせい、人のせい、条件のせいにするをやめて、使徒1:7-8に立ちましょう。それはあなたがたは知らなくてもいいですよ。なぜなら信じるから。イエスはキリスト。私は幸い。聖霊が注がれ証人となります。誰も止められません。何かのせいにするのは全部捨てて、Only 聖霊が臨まれると。この約束を握って祈りをささげるようにしましょう。パウロのように、ピリピ4:6-7を握りましょう。「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」。これを握って希望を持って、希望にあふれる祈りを捧げる信者になりましょう。

### (祈り)

恵み深い父なる神様。今日も尊い礼拝を私たちに与えられ心から感謝申し上げます。私たちの頭の中に何か信仰に対して勘違いがあったならば、今日限りみことばを通してすべて直してください。それで神がなさったこと、神がなさることを信じることを最優先にして、感謝とともに確信とともに希望をもって祈る信者としてひとりひとりを導いてください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン